

【研究ノート】

「外在性」の概念から読み解くソーシャルワーク

溝渕 淳

Jun Mizobuchi

1. 「外在化」という概念への注目

筆者は学生や現場の職員を対象として、「相談援助演習」の授業を担当している。授業では、具体的な事例を提示し、生きづらさを抱えた人びとを支援するにあたり、エコマップを作成して社会資源の把握を行う。10年以上このワークを続ける中で気づかされたことがある。それは、エコマップを作成する際、社会福祉士の資格取得を目指す多くの受講生が、社会資源として社会福祉士の存在（およびその所属先）を挙げる機会が少ないという点だ。学びを進める主体が、将来自分たちが目指す社会福祉士の位置づけを想像できない、あるいは社会資源として認識できていないというのは皮肉である。そして、筆者もその教育に携わる者として、明確に伝えることができていないとの思いから反省させられる。一方、このワークの後、授業の感想やレポートなどに「社会福祉士を目指す立場であるにもかかわらず、その社会福祉士を社会資源として認識していなかった自分自身」への気づきや反省を綴る受講生の数も多い（もちろん、ワークのふり返りの場面で、筆者がそのことへの気づきを促している部分も大きい）。

ここでの受講生の気づきは、「わかっていなかった、認識していなかった自分自身」への気づきである。筆者が授業の中で用いる表現としては「自己覚知」ということになる。注目すべきはその気づきのプロセスである。受講生たちは、エコマップという図像化の手法を用いて、自らが想定している社会資源を書き出し、配置した。この書き出すという行為の中に、受講生の気づき＝自己覚知のきっかけが与えられたと考えられる。

筆者は以前、日本の家族には、「助け合いの伝統がある」ということの思い込みが存在しており、そのことが逆に家族をひとつの単位とした支援の充実を抑制していることを指摘した。そして、「助け合いの伝統」や「絆」といった家族に関する言説が実質を伴わないものであることを家族自身が自覚し、改めた上で支援を展開することの重要性を指摘した。その際に、エコマップなどの図像化の技法は、家族がそのことに気づき、家族自体を客観化して把握する方法のひとつとして有効であると言及した。さらにはこれが、ナラティブ・アプローチで用いられる「外在化 (externalization)」のプロセスと同様のものであることにもふれた^{*)}。

ここで改めて、ナラティブ・アプローチで用いられる外在化という概念について振り返っておこう。外在化は、マイケル・ホワイト (White, M.) とデイヴィッド・エプストン (Epston, D.) がナラティブ・アプローチの実践において、「問題の外在化」という表現で提示した方法である。外在化とは何かを考える上でまず、その反対語である「内在化 (internalization)」とは何かをみていこう。内在化とは、

ソーシャルワークの診断学派に見られたように、「問題を抱えた利用者」といった表現を用い、問題が個人の中に分かちがたいものとして存在する（「問題がしみこんでいる (problem-saturated)」）と考えることを意味する。そして、個人の中に内在する問題の「治療」、ひいては、個人が自らの努力によって変化することが目指される。一方ホワイトとエプストンは、個人から問題を引き離し、客観化または人格化することを提唱する。これが「外在化」である。このことにより、個人と問題との関わりを仕切りなおし、個人が問題からどのような影響を受けてきたのか、また、その問題が維持されることに対して、個人がどのように影響を与えてきたのかに焦点が当たる。つまり問題を対象化し、それとどのように向き合っていくのかという観点から、支援の方針が検討されることになる^{※2)}。

この外在化の概念を踏まえると、ソーシャルワーク実践で用いられる、エコマップやタイムライン（年表）等を作成する図像化の技法もまた、外在化の機能を果たすものであると考えられる。実際にホワイトとエプストンは、外在化を「人々が彼らの人生や人間関係における問題の影響をマッピングできるよう導入される」ものであるとしており^{※3)}、ここで「マッピング」という表現が用いられていることは示唆的である。利用者は支援者との協働により、自らの生きづらさがどのような人や組織、サービスとの関係で成り立っているのか、また、これまでの生活歴において、どのように生じてきたのかを図像化することで客観化し、把握することが可能となる。このプロセスを冒頭の授業の事例に当てはめて考えてみよう。受講生たちは、社会福祉士の学びを進めている中でエコマップを作成した。このエコマップ作成を通して、自分たちの未来の姿を、利用者の生きづらさの中に位置づけられないという問題が外在化された。しかしその外在化、すなわちエコマップ作成という引き離しの試みによって、「わかっていたがなかった、認識していなかった自分自身」という問題に客観的に向き合い、自己覚知や成長のきっかけがもたらされた、ということになるだろう。

以上のように見てくると、図像化の技術や自己覚知など、これまでソーシャルワークが学問と実践の両面で蓄積してきた諸概念を、「外在化」をキーワードとして整理する可能性が開かれる。本研究ノートは、その試みの一端として位置づけられる。

2. 支援の長さを左右する外在化

ソーシャルワーク発展の歴史を概観すると、数々のアプローチの中に短期的な支援を志向するものが存在していることがわかる。機能学派にはじまり、行動療法や危機介入、そして課題中心アプローチなどが挙げられる。これらのアプローチの多くは、診断学派に代表されるような、いわば「主流」と呼ばれるアプローチが長期的な支援になりがちであったことに対するアンチテーゼとして派生してきたという経緯がある。一方でこれらの短期的な支援の諸アプローチは、危機理論や学習理論など、心理学や精神医学の諸成果を背景として生み出され、多問題事例のように、利用者を中心として複雑な人間関係が交錯するようなケースなどには不向きとされる。これらの中でも、ウィリアム・リード (Read, W.) とローラ・エプシュタイン (Epstein, L.) が課題中心アプローチを確立させる基礎となった実証的なデー

タは注目に値する。それは、「クライアントがしっかりと意識の中で捉え、表現し、認めることのできる問題を標的問題として取り上げる^{※4)}」といった実証的知見である。これを外在化の文脈によって言い換えるならば、「支援を受ける以前のところで、利用者が自らの問題を外在化できている場合、短期的な支援へと持ち込みやすい^{※5)}」ということになる。実際、機能学派はその草創期において、相談内容のある程度自覚（例えば、経済的な問題）できている利用者が、支援者の従事する公的機関等に自ら赴くような状況に適した支援として、長期的な支援になりがちな診断学派への批判とともに採用されるようになった。つまり、機能学派の支援においては、利用者が自らの問題をある程度外在化できていることが前提となっている。他にも行動療法では、目に見えて把握することのできる「行動」に焦点を合わせるという戦略をとることによって、問題やその変化を客観的にとらえる、すなわち外在化することが容易となっている。また、危機介入も、現在の危機的状況にのみ焦点を当て、それを具体的に明らかにしていくことに焦点を置くため、比較的短期間に問題を外在化することが可能になる。

このように短期的な支援は、あらかじめ利用者によって問題の外在化がなされたり、あるいは、行動や危機的状況など、問題の表象を限定することで、問題の外在化を速やかに行うことができたりする場合に適用される。これと比較して、診断学派や心理社会的アプローチなどの、いわゆる「主流」とされるアプローチにおいては、利用者は「なぜ自分自身がこれほどまでに苦しんでいるのかわからない」、「そもそも自分の問題がどのようなものであるのかわからない」状況にあることが多い。支援者はマイクロからマクロに至る「広がり」と、生育歴や未来の展望などの「時間の流れ」の双方について多様な情報を収集し、時間をかけながらその問題のありようを明らかにする。つまり長期的な支援の長期たる所以は、利用者における、問題の外在化の不十分さに求めることができる。これに加えて、長期的な支援では利用者自身が自らの問題を具体的に把握できていないことにより、支援者による問題の断定（決めつけ）に利用者が抵抗なく同意してしまうなど、支援者の権力性がより強化されがちとなる。時間がかかること、そして、支援者の権力性は、短期的な支援や「ポストモダン・ソーシャルワーク」がいわゆる「主流」のソーシャルワークを批判する際の焦点となっていた。以上のように、「外在化」の概念を援用することで、ソーシャルワークの諸アプローチを布置した（constellate）上で理解する可能性が開かれる。

3. ストレングスの外在化

支援の短期・長期を左右する要素のひとつとして、利用者における問題の外在化の度合いがあると考えるとき、すでにソーシャルワークの中で活用されるようになって久しい「ストレングス」概念についても、改めて検討する必要がある。ストレングスとは、個人や環境が有する良さや強み、長所、資源などを指す概念である。この概念の登場の背景には、ソーシャルワークのもつ権力性、すなわち支援者の主導により利用者の抱える問題を断定してしまうことの抑止と、支援者による関わりが、利用者の問題さがしに終始してしまう危険性を克服しようするという流れがあった。筆者も授業や演習において、

利用者のストレングスを把握することの重要性を強調することが多い。また、インテークの際に記入するフェイスシートや、「相談援助実習」において、実習先で作成するよう学生に指導している「情報整理シート」の中にも、利用者のストレングスを記入する欄が設けられている。

筆者がストレングスを演習の中で扱うようになった当初は、「相手の良いところをさがす」であるとか、「短所を長所に変える（リフレミング）」といった内容のワークを行い、「良いところを見つけ、伸ばす支援が大切」などと総括することが多かった。しかし、これらのワークを繰り返すなかで、気付かされることがあった。それを端的に記せば、「問題であれ、ストレングスであれ、利用者自身において自覚（外在化）されていなければ、支援者の押し付けでしかない」ということである。つまり、ストレングスに注目する支援を展開しても、支援者の権力性が保持される可能性は十分にあるのだ。したがってここでも、利用者が自らのストレングスに気づくプロセス、すなわち、外在化のプロセスが重要となる。利用者が自らのストレングスを自覚している場合には、それらを高める形での短期的な支援が展開されるが、まったく自覚したり見出したりできない状況にある場合は、長期的な支援となる。そこでは、支援者が利用者に沿いながら協働することで、利用者が自らのストレングスに気づいていくような関わり方が求められる。このような支援の展開は、思うような結果が出なくても、長い時間をかけて地道に取り組んだこと、その積み重ねをストレングスとして捉え、利用者に自覚してもらうことも可能となる。今後は、単にストレングスという概念の目新しさにとらわれることなく、それらを外在化していくプロセスの重要性もあわせて理解されることが求められる。

4. 「偶有性の確保」という貢献

野口裕二は、ナラティブ・アプローチを紹介した文献の中で、問題を内在化させた場合の利用者 - 支援者関係と、問題を外在化させた場合の利用者 - 支援者関係とに違いがあることを指摘している^{※6)}。問題を内在するものとした場合、支援者は利用者にとって治療者の役割を果たす。また、問題が個人に内在化する以上、利用者自身が自分に向き合い、変わっていくことが目標となり、支援者はその変化に向けて指導・助言する役割を担う。一方、問題を外在化した場合には、支援者は利用者にとって、外在化された問題と向き合い、取り組んでいくことを助ける役割を果たす。そのような関係のもとで支援者は利用者にとっての「同志」であり、相互に対等な関係が担保される。このような同志としての関係は、前節における、利用者が自らのストレングスを見出すプロセスに沿う支援者の姿とも重なる。

野口は利用者と支援者の、同志としての関係構築を実現させるような取り組みが、現在さまざまな場で実践されていると指摘する^{※7)}。具体的には、リフレクティング・チームや当事者研究、オープンダイアログなどである。これらの実践においては、問題の「外在化」とそのプロセスで実現する利用者と支援者の対等の関係が強調されている。その中のひとつ、「リフレクティング・チーム」はトム・アンデルセン（Andersen, T.）らによって提唱された方法である^{※8)}。従来の精神療法、とりわけ家族療法でよく用いられていたのは、マジックミラー越しに専門職が家族を観察し、互いの理解や支援の方針を話し

合うといった手法であった。そこでは、支援者同士が家族に対する批判を口にするといったことも生じるが、家族や利用者はそのことを知る機会がなかった。そのような意味においては、ソーシャルワークにおけるスーパービジョンや、ケースカンファランスも同様の構造であろう。

アンデルセンらは、このような構造を逆転させて実践した。すなわち、専門家同士の話し合いを利用者や家族に観察してもらい、その話し合いについてどのように感じたのかなどについて、感想を伝えてもらうようにした。この逆転は、支援の中で何度か繰り返されて行われる。その結果、専門家同士が互いの意見を否定したり批判したりするようなこと（いわゆる「批判のための批判」など）が減り、互いの意見や考え、その背景等を尊重するようになった。また、利用者や家族も、自分たちが他者、しかも様々な専門分野をもつ者たちからどのように見られているのかについて、理解を深めることになった。結果、利用者が「～しかない」と理解している問題のありようについて、「～もありうる」という、オルタナティブな理解を得ることが可能となる。また、支援者においても、「～しかない」という自らの見立てが「数ある解釈の中のひとつ」にすぎないことが自覚される。このリフレクティング・チームの実践により示唆されているのは、利用者における問題の外在化のプロセスが、利用者と支援者の関係に変化を生じさせ、支援者の解釈の絶対化とでも呼ぶべきものが、相対化される機縁となっていることである。

絶対化（「～しかない」）が相対化される（「～もありうる」）ことは、時として専門職を不安に陥れる。なぜなら、専門的な教育や訓練を享受した専門職は、その専門的な知見により「～しかない」という何らかの解答や解釈を示す存在であると考えられている面があるからだ。筆者は以前、ソーシャルワークの専門性が、他の専門職の専門性と一線を画すものであることを指摘した。他の専門職が人間の側面（こころ、病、老い…など）を切り取り、そのことに関する知識や技術を習熟していく志向を有するのに対し、ソーシャルワーク専門職は、それらの側面の根源にある「人間そのもの」へと回帰させていく志向を有するというものである。これは、ソーシャルワーク専門職が、他の専門職による絶対化を相対化する存在であることを示唆している^{※9)}。

以上の点を踏まえて、外在化の概念への検討を通して導き出されるソーシャルワークの貢献についてまとめておきたい。利用者による問題の外在化のプロセスにおいて、ソーシャルワーク専門職は利用者とともに問題に立ち向かう「同志」のような関係を構築する。そして、「～しかない」という答えを指し示すのではなく、むしろ「～もありえた」、「～でもよかった」という、様々な可能性を考え、担保する役割を担う。「～もありえた」、「～でもよかった」という状態を「偶有性 (contingency)」と表現するならば、この偶有性の確保こそが、ソーシャルワークの貢献のひとつであると考えられるのではないだろうか^{※10)}。もちろん、「～もありえた」、「～でもよかった」が正解であるとは限らないし、利用者が自ら「～しかない」と選択した後に、これらがまったく意味をなさないものになってしまうことがほとんどであろう。しかし、私たちが何かを選択する際、それ以外の選択肢が他にもありえたことを知っておくこと、他の「ありえた」選択肢を担保しておくことは、ある種の安心感を生じさせる。このように、偶有性の確保は、あくまでも利用者の選択に沿いながらも、それ以外の選択肢を排除しないまま

にしておくことで、ある種のセーフティネットを構築することにつながる。

5. 専門性の外在化

本研究ノートでは、「外在化」をキータームとしながら、ソーシャルワークが蓄積してきた諸概念を整理するとともに、ソーシャルワークが利用者支援の中で「偶有性の確保」という貢献を果たす可能性を見出した。これまでの議論をふまえて、ソーシャルワーク専門職がどのような実践を行うのかを記述すると、以下の通りとなる。

「ソーシャルワーク専門職は、利用者との対話を重ねながら、そして時には図像化の技法等を用いながら、利用者が、自ら取り組むべき問題を外在化するプロセスをサポートするとともに、その問題に立ち向かう同志としての信頼関係を構築していく。また、支援者や利用者の見立てが絶対的なものとならないように、多職種と連携するなどの方法を用いながら、さまざまな解釈を提示することで、偶有性の確保に努める。その上で、利用者の選択を尊重しながら、外在化された問題の解決に取り組んでいく。その際に活用する支援やサービスに関しても偶有性の確保に努め、状況の変化にあわせた柔軟な対応ができるようにしておく。」

以上の記述は、筆者が日常的に学生等に説明しているソーシャルワーク実践の内容とそれほどかけ離れたものではない。いくつか補足しておきたい。まず、信頼関係を築き、偶有性を確保しながら問題の外在化を目指すというプロセスは、インテーク～アセスメント段階に相当する。続いて利用者の選択を尊重しつつ、問題の解決に取り組んでいくというプロセスは、プランニング～インターベンション段階に相当する。次に、偶有性の確保を実現する方法として、多職種の連携を提示している。「～もありえた」、「～でもよかった」ものを提示する際、ひとりのソーシャルワーク専門職だけでは限界がある。そこで、多様な専門職と連携しながら、それぞれの解釈や見立てを引き出し、提示することにより、偶有性が確保される。また、活用する支援やサービスに関しても、多様な担い手やサービス、社会資源に関する情報を収集し、連携しておくことが、支援をより充実したものにする。さらに偶有性の確保は、モニタリング～再アセスメント段階において支援を見直す際にも有用となる。

偶有性を確保するための実践を展開する上で、利用者をその一員とするような支援チームの構築は不可欠であり、ソーシャルワーク専門職はその担い手となる。多様性を確保しながら、利用者に対等の立場に立ち、対話を重ねながら支援を展開していくという実践の形態は、オープンダイアログの実践を想起させる。実際にオープンダイアログの実践では、外在化やリフレクティング・チームが多用される。野口は、オープンダイアログを紹介する中で、その実践が①支援者と利用者が共同で生み出すという姿勢を大切にしていること、②結論を急がず不確実性に耐えること、③専門家同士の分業や協働の関係を想定しないことを挙げている^{※11}。このうちの②「不確実性に耐えること」については、多様な声を共存させ続けることが重視されており、本研究ノートでいうところの「偶有性の確保」と親和性が高い。一方、③について野口は、利用者と支援者の平等化や民主化を徹底させていく場合、支援者はそれ

ぞれの専門性を持ち寄って、それをうまく組み合わせるのではなく、あくまでも一参加者として対話に参加することが求められるとしている^{※12)}。この点については、本研究ノートが提示する多職種連携の考え方とは趣を異にする。つまり、他職種連携では、あくまでも参加者の専門性が維持された上での協働の実現が目指されているのに対し、オープンダイアログにおいては、その専門性が消失し、一参加者として他のメンバーとの平等的かつ民主的な関係を築いていくことが目指される。この違いはどこからくるのかについて、最後に考えておこう。

手がかりとして、大澤真幸による、福岡県の「宅老所よりあい」を題材とした考察がある^{※13)}。大澤は、下村恵美子や村瀬孝生らのよりあいでの実践にふれ、彼らがナラティブ・アプローチにおける「無知の姿勢」に近い形で、支援者の側が利用者（その多くは認知症の高齢者である）の世界に定位し、その世界の見え方に合わせる形で支援を展開する様子（例えば、多くのドキュメンタリー番組や映画等で紹介されているものとして、「家に帰りたい」と主張し、建物を出てひたすら家を目指して歩き続けようとする利用者を引き留めず、一定の距離をおいて追いかけていくといった関わり方がある^{※14)}）と、その姿勢が支援に多様な効果を生じさせていることに驚く。そして、よりあいでの支援を「素人性」に根ざした支援と表現し、そこでは、「専門的な技術や知識は、あまり役に立たない」とする。

しかし続けて、大澤は重要な指摘をしている。この素人性は、専門性が否定するべきものであることを知った上で、つまり、一度専門性を潜り抜けた上で確立されるのだ。言い方を変えれば、一度専門的な教育を受け、専門的な知識や技術を有している（と自覚している）者が、あえてその専門性を捨て去るという迂回（プロセス）を経ることが重要であるのだ^{※15)}。この迂回は、利用者が自らの問題を内在化した状態から引き離し、外在化して捉えていくプロセスとパラレルである。支援者に内在する専門性が、利用者や他専門職との関わりを通して引き離され外在化される。その結果、支援者は一参加者としての立場を獲得し、他のメンバーとの平等的かつ民主的な関係を築いていくことができる。先述したリフレクティング・チームは、この迂回を実現させるための技法として考えることができる。

したがって、他職種連携とオープンダイアログは別のものではない。利用者を含む他職種連携のチームの中で、利用者の問題の外在化と偶有性の確保が行われるプロセスの中で、チームを構成する専門職の専門性が引き離され外在化されていく。その結果オープンダイアログで理想とされる平等的かつ民主的な関係が実現する。両者は対比されるべきものではなく、チームの成長に基づく変容の、比較的初期の局面（スタート）と最終の局面（ゴール）を示しているに過ぎないと考えられる。

利用者の問題の外在化を通じた、支援者における自らへの気づき＝外在化というモチーフは、改めて、本研究ノートの冒頭で示したエコマップの事例における受講生の変化を想起させる。おそらく、ソーシャルワーク専門職において必要とされる「自己覚知」についても、外在化の概念を用いて検討し直すことが可能であると考えられる。これについては稿を改めて取り組みたい。また、本研究ノートでは、利用者個人と支援者との関係を中心に考察してきたが、マクロ・ソーシャルワーク、すなわち地域を対象とする支援において、外在化や偶有性の確保という両概念がどのように活かせるのかなど、興味は尽き

ない。今後も「外在化」と「偶有性の確保」の概念を基礎としながら、これまで蓄積されてきたソーシャルワークの知見を読み解く試みを継続していく。

【註】

- ※1 溝渕淳 (2018) 「日本における家族の再統合支援をめざして」、『人間福祉研究』第 16 号, 広島文教女子大学人間福祉学会, P2-15。
- ※2 M.ホワイト・D.エプストン (小森康永訳, 1992) 『物語としての家族』, 金剛出版。
- ※3 M.ホワイト・D.エプストン (小森康永訳, 1992) 『前掲書』。
- ※4 W.リード・L.エプシュタイン (山崎道子訳, 1979) 『課題中心ケースワーク』, 誠信書房。
- ※5 芝野松次郎 (2005) 「課題中心ソーシャルワーク」, 久保紘章・副田あけみ編著『ソーシャルワークの実践モデル』, 川島書店, P93-115。
- ※6 野口裕二 (2016) 「医療コミュニケーションの変容—平等化と民主化をめぐって—」, 『保健医療社会学論集』, 第 27 卷 1 号, 日本保健医療社会学会, P3-11。
- ※7 野口裕二 (2016) 「前掲論文」。
- ※8 T.アンデルセン (鈴木浩二監訳, 2001) 『リフレクティング・プロセス』, 金剛出版。
- ※9 溝渕淳 (2009) 「ソーシャルワークの課題と目的」, 太田義弘編著『ソーシャルワーク実践と支援科学—理論・方法・支援ツール・生活支援過程—』, 相川書房, P11-22。
- ※10 この偶有性の概念は, 大澤真幸によるニクラス・ルーマン開設に着想を得た。大澤真幸 (2019) 『社会学史』, 講談社。
- ※11 野口裕二 (2016) 「前掲論文」。
- ※12 野口裕二 (2016) 「前掲論文」。
- ※13 大澤真幸 (2002) 「老人としての他者」, 金子勝・大澤真幸『見たくない思想的現実を見る』, 岩波書店, P62-81。
- ※14 例えば大宮浩一監督 (2010) 『ただいま それぞれの居場所』, 大宮映像製作所など。
- ※15 大澤真幸 (2002) 『前掲書』。

【参考文献】

- ・T.アンデルセン (鈴木浩二監訳, 2001) 『リフレクティング・プロセス』, 金剛出版。
- ・金子勝・大澤真幸 (2002) 『見たくない思想的現実を見る』, 岩波書店。
- ・久保紘章・副田あけみ編著 (2005) 『ソーシャルワークの実践モデル』, 川島書店。
- ・野口裕二 (2002) 『物語としてのケア』, 医学書院。
- ・野口裕二 (2016) 「医療コミュニケーションの変容—平等化と民主化をめぐって—」, 『保健医療社会学

溝渕：「外在性」の概念から読み解くソーシャルワーク

論集』, 第27巻1号, 日本保健医療社会学会, P3-11。

- ・溝渕渥 (2018) 「日本における家族の再統合支援をめざして」, 『人間福祉研究』第16号, 広島文教女子大学人間福祉学会, P2-15。
- ・大澤真幸 (2019) 『社会学史』, 講談社。
- ・太田義弘編著『ソーシャルワーク実践と支援科学—理論・方法・支援ツール・生活支援過程—』, 相川書房。
- ・オープンダイアログ・ネットワーク・ジャパン (2018) 「オープンダイアログ 対話実践のガイドライン」, 『精神看護』第21巻2号, 医学書院, P105-132。
- ・W.リード・L.エプシュタイン (山崎道子訳, 1979) 『課題中心ケースワーク』, 誠信書房。
- ・副田あけみ (2005) 『社会福祉援助技術論』, 誠信書房。
- ・M.ホワイト・D.エプストン (小森康永訳, 1992) 『物語としての家族』, 金剛出版。
- ・M.ホワイト (小森康永・奥野光訳, 2009) 『ナラティブ実践地図』, 金剛出版。